

## 山の辺の道紀行（2）

平成 19 年 10 月 14 日（日）

近畿双松会歴史ウォーキング第 2 回行事

報告者 押田 良樹

第 2 回の歴史ウォーキングは 10 月 14 日（日）、昨年の山の辺の道の後編として天理～柳本のコースを歩いた。

今回の参加者は家族を含め 24 名、昨年につき松江から 9 期の岩成哲男さんが遠路参加、また昨年同様天理市ボランティアガイドの会植村勝弥さんに案内をお願いした。

9 時に天理駅前集合、天候は暑くもなく寒くもなく絶好のウォーキング日和となった。出発前に全員の紹介、記念撮影、植村さんから豊富な資料が配布される。



アーケードでは奈良県一長い（約 1 km）という天理商店街を歩いて行くとやがて左側に大きな天理教本部の建物がある。周囲の建物は「おやさとかた」といって全国各地から来る信者の宿泊や研修の施設とのこと。規模の大きさに圧倒される。

石上神宮に行く前に植村氏が案内したのは山の辺の道のマップには出ていない場所

で小野小町と僧遍昭との贈答歌の歌碑のあるところ。

このあたりは昔良因寺という大きな寺の境内だったところである。

都からこの地に旅してきた小野小町が近くの良因寺にいるという僧遍昭を訪ね一夜の宿を乞うたときの贈答歌である。

小町

いそのかみ旅寝をすればいと寒し

苔の衣を我にかさなむ

遍昭

世をそむく苔の衣はただ一重

かさねばうとしいぎ二人ねむ

植村さんの表現によれば「恋上手」だったという小野小町の面目躍如たるものがある。

また、遍昭（遍照とも）は桓武天皇の孫だが在俗中はかなりプレイボーイだったらしく、出家してもさすがに風流な和歌のやり取りをしたものである。百人一種の「天つかぜ雲のかよひ路・・・」は遍昭の作である。「今こむといひしばかりに・・・」の作者素性法師は遍昭の子。

石上神宮はここから南へ少し行ったところにある。

参道の入り口に「官幣大社石上神宮」と書かれた巨大な石標がある。植村さんによればこの字は富岡鉄斎の揮毫によるという

説が最近有力になっているそうだ。鉄斎は一時期石上神宮の神官をしていたのでその可能性は十分あるらしい。



石上神宮石標の前で

参道を上っていくと左手に古色蒼然たる柿本人麻呂の歌碑がある。万葉仮名で「未通女等之 袖振山乃 水垣之 久時従 憶寸吾者」とある。「をとめらが、そでふるやまの、みづかきの、ひさしきときゆ、おもひきわれは」と読み、「この神社に瑞垣のできたず一と昔からあなたのことを思っていました」という意味だそうだ。

石上神宮は記紀にも出てくる古社で日本書紀に「神宮」として記されているのは伊勢神宮とここだけだそうだ。物部氏の氏神で祭神は布都御魂大神(ふつのみたまのおおかみ)。ご神体である神剣「布都御魂剣(ふつのみたまのつるぎ)の神霊である。

布都御魂剣は高天原から派遣された建御雷神(たけみかずちのかみ)が稲佐の浜で大国主命に国譲りを迫ったときに威嚇に使った剣で、のちに神武天皇の大和入りのとき危機を救ったといわれる剣である。

参道はいかにも由緒ある神社らしく鬱蒼とした木々に挟まれ厳かな雰囲気があるが社域は意外に狭い。

あちこちに鶏が放し飼いになっている。

鶏は野犬に襲われるので夜は樹上に飛び

乗って木の枝で眠るらしい。

拝殿は鎌倉時代に建てられ国宝指定を受けている。摂社の出雲建雄神社拝殿(いずもたけおじんじゃはいでん)も国宝である。

こちらは割り拝殿という珍しい作りになっていて大正時代に内山永久寺から移築したものという。祭神は出雲建雄神(いずもたけおのかみ)。この神は須佐之男命が倒した八岐大蛇の尻尾から出てきた天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)の神霊といわれる。

のちに日本武尊が東征の途上駿河の野で火攻めに遭ったときこの剣を振るって草を薙ぎ難を免れたことから草薙の剣(くさなぎのつるぎ)とも呼ばれる。

この剣は熱田神宮のご神体になっている。

この神社のもうひとつの国宝は有名な七支刀(ななつさやのたち/しちしとう)である。4世紀に百済から献上された(先方は下賜したという)といわれ、その銘文の解釈・判読を巡って論争が続いている。



石上神宮

布都御魂剣、天叢雲剣(草薙の剣)、七支刀と剣に関係した事柄が多いが、この神社は朝廷の武器庫であったといわれておりなるとも思わせる。また物部氏は出雲系という説もありなんとなく親しみを覚える神社である。

大田市には石見一宮「物部神社」がある。

参拝後内山永久寺跡に向かう。この寺は鳥羽天皇の永久年間に創立され広大な寺域に数多くの塔頭が建ち並び隆盛を誇っていたが明治維新の廃仏毀釈により寺領（約1000石）を没収され廃寺になってしまった。大きな昔の寺図が掲示されていたが大変大きな寺院であったことが分かる。

今は本堂池が僅かに往時を偲ばせるだけである。

多くの貴重な文化財が散逸してしまったが、地元の人々のところにはまだ結構古いものが残っているとのことである。

偶然だが一行の中の5期寺本さんは母方のルーツがこのあたりだそう。その奇縁を聞いた植村さんからこの地に関する資料を貰っていた。

内山永久寺跡付近



柿畑や黄金田の中を歩いて次の夜都伎神社を目指す。コスモスやもう枯れかけてはいるが彼岸花が田に彩を添えている。

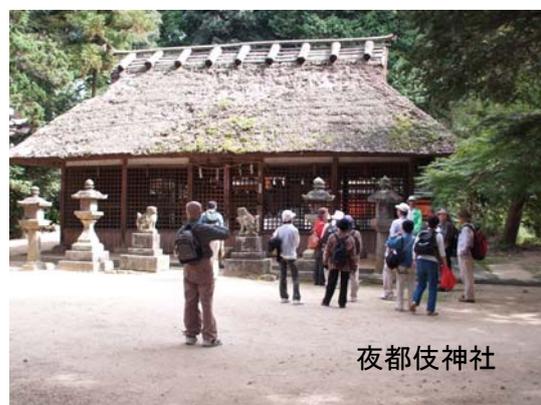
野草の説明



植村さんはそのあたりに生えている植物を見せて解説をしてくれる。繊維を採り木綿以前の衣服の材料にしたという苧麻（チョマ、カラムシともいう）、胃腸薬になるゲンノショウコやドクダミ、ミゾソバなど。

歴史だけでなく植物の知識も豊富で勉強になる。

東乗鞍古墳を右手に見て少し行くとやがて夜都伎神社に着く。延喜式にもある古社で奈良の春日大社と関係が深いそうだ。拝殿は萱葺で素朴な感じがする。



夜都伎神社を過ぎたあたりから濠が目立つ。集落の周りに濠をめぐらせ外敵に備えた「環濠集落」の名残である。竹之内町、萱生（かよう）町環濠集落として有名だ。

右手に大和平野が広がっている。遠くに二上山、葛城山が霞んでいる。手前に見えるのは畝傍山と耳成山。昔は空気が澄んでいてもっとはっきり見えたことだろう。

右手に西山塚古墳（全長114m 前方後円墳）があった。継体天皇の後である手白香皇女（たしらかのひめみこ）の墓は近くの衾田陵（ふすまだりょう）（西殿塚古墳）とされているが築造年代から継体天皇の時代から200年程度古く、この西山塚古墳の方が手白香皇女の陵である可能性が高いとのことである。

正午を過ぎそろそろ昼食時となった。念仏寺を過ぎるとすぐ大和（おおやまと）神社のお旅所に到着。ここで昼食となり思い思いの場所に陣取り弁当を開く。今回の最多参加の期は9期で6人、一箇所に集まって同期会を開き賑やかにやっている。雨天でなくて本当に良かった。



30分ほど休憩して出発する。

左手に竜王山（衾道）が見えてきた。このあたりの景色はいかにも山の辺の道らしく素晴らしい。日本武尊の「大和は国のまほろばたたなづく青垣・・・」の歌を思い起こさせる。

道端に柿本人麻呂の歌碑がある。

「衾道乎 引手乃山尔 妹乎置而 山徑  
往者 生跡毛無」

読み 「ふすまぢを ひきでのやまに  
いもをおきて やまぢをゆけば いけりともなし」

愛する妻を亡くし引き手の山に葬ってきたばかりの人麻呂の悲しみが伝わってくる。

植村さんの解説を聞いていると逆方向から大集団がやってきた。250名いるという。先頭は「関西歩け歩け協会」の幟を立てておりかなりのスピードだ。その中に偶然筆者の知り合いを見つけ声をかけると驚いていた。後で聞くと桜井から天理まで約

17キロを3時間25分（時速約5キロ）で歩いたそうだ。しかしやはりこういうコースはゆっくり説明を聞き会話と景色を楽しみながら歩いたほうが良いと思う。

やがて長岳寺に到着。この寺は天長元年（824年）淳和天皇の勅願により弘法大師が大和神社の神宮寺として創建した古刹である。花の寺としても知られ特に春のつつじ、かきつばたが有名で紅葉も美しい。



文化財も豊富にあり、たまたま狩野山楽筆の大地獄絵が本堂で開帳されていた。

9幅から構成されているが、全体が1枚の絵となっている。図柄は大変精緻に描かれていて迫力満点だ。こういう絵を子供の頃からよく見せておけば、大人になってから悪いことをしないのではないかと思うが甘いだろうか。

本尊の阿弥陀如来像は重文で最古の玉眼仏とされている。両脇侍の観世音菩薩、勢至菩薩と多聞天、増長天も重文に指定されている。本堂の縁側の天井に人の足跡が残っている。松永久秀が竜王山城の十市遠忠を攻めた戦いのとき武士の血で染まった足跡がついた床を天井板にしたものだそうだ。

これで今日の行程は終わり、近くの天理市トレイルセンター（愛称「トレイル青垣」）

